民間説話研究の跡

大藤時彦

一

わが国における民間説話の研究は最近いろいろな方面から盛んに行われている。わたくしはここに現在にいたるまでの研究を省み、今後の研究に対する問題のあり所を尋ねてみたいと思う。ここにいう民間説話とは昔話と同義語で、英国のフォークテールズ、ドイツのメルヘンと大体同じとみてよい。民話、民譚、お伽噺、童話などの名称もその一つ一つについていえば多少異った意味を持っているがほぼこの範囲に入るものとして筆を進めていきたい。また伝説は昔話とは区別されなくてはならないが、その内容はしばしば共通していることがあり、ある話が昔話として、また伝説として語られていることが稀でないので厳密な意味の昔話研究に限らず広い意味の民間説話全体にわたっての研究をみていくことにする。

さて説話の研究といえばいわゆる記録文芸としての説話文学がある。日本霊異記、今昔物語、宇治拾遺物語、沙石集、お伽草子などに収録された説話の研究は民間説話のそれよりも先立って行われていた。これらの文献にある説話と中国やインドのものとの比較研究も行われ、芳賀矢一博士の「攷證今昔物語集」の如き名著も出ているが、民間説話の研究はずっとおくれ、厳密にいえば民俗学の研究がはじまり民間説話の採集に着手されるまで待たねばならなかった。しかしながらこの方面の考察が全然なされなかったというのではなく、すでに江戸時代にも若干の研究が行われていたのである。

童話の名で呼ばれていた桃太郎とか猿蟹合戦などの話は江戸時代に入ると赤本とか黒本とかの名で書物にされ出した。そして山東京伝や滝沢馬琴などがこの童話についての考証をしている。これらの事柄については高木敏雄氏の「童話の研究」（大正五年刊）に親切に説かれているので改めて筆にするのもむだであるが話の順序上多少これに触れておきたい。

この「童話の研究」はわが国における昔話の研究書として

は恐らく最初のまとまった著述だと思う。婦人文庫刊行会の企画になる家庭文庫の一冊として出版されたので純然たる学術書というよりも啓蒙的な解説書であるが、今日においてもこういう本はとぼしいのでその内容を掲げておくと、第一章童話昔噺お伽噺、第二章童話の目的、第三章童話の起源と其の伝播性、第四章童話選択の標準、第五章童話の適用、第六章童話の弁護、第七章智力の勝利、第八章成功と失敗、第九章滑稽趣味、第十章童話と天然伝説、第十一章史的通観となっている。

高木敏雄氏によると童話は児童の説話、あるいは児童のための説話である。この童話は決してヨーロッパの言葉の訳語ではなく、江戸時代から使用されていた。山東京伝は「骨董集」上編中之巻に、「祖父祖母之物語」と題して「異制庭訓」を引用し、祖父祖母之物語（おおじおばのものがたり）は、「今童のぢゝばゝのむかしばなしといふもの是なるべし」と書いている。さらに同じ巻に、「打出小槌・猿蟹合戦」と題し、「異制庭訓」に、「祖父祖母之物語とあるは、むかしむかしぢゝとばゝとありけり、といふ発語をとりて、名目にしたるものなるべければ、童の昔ばなし、いとふるきことなり。おのれ二十四五年前、童話（むかしばなし）の出所をたづねて書きとどめたるもの、童話考と名づけて一冊あり。いまだ考の足ざる所あれば、年ひさしくひめおきぬ」と述べ、隠笠隠簑のことは古歌にもよまれているが、打出小槌のことをしるしたものは少ないとて、平家物語祇園女御の段や平康頼の「宝物集」にある打出の小槌をあげ、さらに「酉陽雑俎続集」の金椎子を取上げ和漢相似たる談ありと記している。猿蟹合戦については、「義楚六帖」にある果物を投げて隠者の額を傷つけた猿を猟師が射殺した話を原典ではないかといい、童話のもとについて次のように述べている。「童話の原をたづぬるに、おおくは仏説より出たり。或は国史物語ぶみにより、或は漢土の故事にもとづきたるもあり。よしなしごととといへども、かく其理を分解するときは、児女勧懲の一助なきにしもあらず。もと、心ある人の作り出したるものなるべし。虎関和尚の異制庭訓は今文化十年より、凡五百年前の書なれば、祖父祖母の童話のふるきをおもふべし。五百年前の童話、唯童の口ずさみにつたふるのみにて、今に残れるは不思議といふべし。なほ愚考あれども、他日童話考を刻すべき志あれば、ここにはもらしつ。」童話を勧善懲悪の目的をもった教訓としてつくられたものと考えているが、非常に古くから口承によって伝えられた事実を不思議といっているのは興味がある。

山東京伝に次いでは、滝沢馬琴が童話について考証している。彼は「玄同放言」の中で、景清、玉藻前、久米仙人、酒顚童子などの伝説を取上げて考察を加えている。史実と伝説を区別し、史実に対して伝説を小説と呼んだ。これは当時としては他にすぐれた見解と称すべきであった。彼はさらにその著「燕石雑志」巻之四に、「猿蟹合戦」、「桃太郎」、「舌切雀」、「花咲翁」、「兎大手柄」、「獼猴の生贈」、「浦島之子」

と七つの童話について綿密な考証を試みている。高木敏雄氏はこれについて、説明は頗る精密であるが、今日の学者の眼から見ると間違った点が少くない。しかしながら馬琴が浦島太郎の話を歴史的伝説としないで、他の六つの話と同じく民間説話として論じたのは実に非凡な卓見といわざるを得ないと称讃された。また馬琴が上の七篇の説話に童話の字をあて「わらべものがたり」と読ませているが、彼が歴史的伝説もしくは地方的伝説と民間童話とを明瞭に区別して童話の二字を正しく使ったことは京伝とともに特筆すべきことであり、この点において彼等両人は明治大正のいわゆる御伽噺作者に比して数等立勝っているとまでほめている。そして世界の文明国を通じて此くの如く適切で正しい熟字は自分の知っている限り、日本語の童話とドイツ語のキンダーメルヘンの二つしかないと附言してある。

馬琴の考証についてその一つ一つをここに紹介するのは繁煩なので興味のある若干の点をあげてみる。昔より童蒙のする物語も、おのずから根く所がある。思い出ずるまゝにここに注をしてみるが、おそらく附会の説も多いだろうと馬琴はことわっている。まず猿蟹合戦について中国日本の文献を数多引いて考証してあるが、猿と蟹との争いは中国にはなく虎と蟹ならばあると「続博物志」を引用している。その他、蟹と蛇や蚯蚓との闘いや蟹の害などについての怪異譚を掲げている。この馬琴の例話としてあげた猿蟹合戦で蟹に助力するものの中、炉中にあって発ねるのが普通の話のように栗でなくて鶏卵になっているのは面白い。

第二の桃太郎については、竹の節から児の生まれたのは和漢に例があるが、桃の実から生まれたということはきかない。桃は百鬼精物を殺す力があるのによったのであろうとある。その他、この説話の一つ一つの趣向についてその因って来たるところを推定してあるが、いずれも牽強附会をまぬかれないようである。黍団子の黍は穀の長なる故に、犬をもって敵の城を抜いたのは畑時能の名犬に擬したのであり、雉を出したのは天稚彦が高天原へ帰来しないので雉を使として様子をみにやらした故事によるとか、鬼が島は鬼門を表わすとかいった風である。そして桃太郎の話全体は源為朝の事に擬したのだといっている。すなわち保元物語為朝鬼が島渡りの段がそれであり、御曹子島めぐりという絵巻物が世に行われた頃それに擬してかかる物語ができたのであろうと述べてある。次に舌切雀は前の二つの話とちがって宇治拾遺物語に腰折雀の話がある。馬琴はこの二つを比べたのち、宇治亜相が捜神記にある楊宝が黄雀の命を救ったという故事を知ってこの物語を作ったのであろうといっている。

第四の花咲翁は物うらやみするものを誡めてあるので、舌切雀のことから思いおこし、それにいろいろの物語から彼此とえらんで一つの物語としたのであろうと書かれている。犬がよくその主人を知り、恩に報ゆるという各種の文献にある故事を引いてある。第五の兎の大手柄はカチカチ山のことである。これも例によって中国の故事をもっていろいろと考証

してある。兎が田翁の友たりし理由をたずね、兎が舟を造ったのはこの動物が水徳の祥とされているためだなどとある。また狸については佐渡の有名な団三郎狸のことまでも引出して論じてある。次に「獼猴の生膽」は「祖庭事苑」によるものとしてその本文を掲げている。最後に「浦島之子」のことを説いている。この物語はすでに日本紀雄略記に見えているが、馬琴は浦島の玉手箱というのは陶淵明が搜神後記に見えた袁相根碩等のことを附会したのだろうといっている。遣唐使などとともに学問をしにシナへ行ったものが袁相根碩の奇談寓談を伝えきいて浦島が子の話をつくりあげたのが日本後記に記載せられ、それがのちに雄略記に追書せられたのではないかともいっている。さらに「浦島子伝」の如き文章は、日本後記の趣をうけて張文成の遊仙窟に擬して綴ったもので延喜の頃の文人の述作かといい、隠れ里伝説について考慮を加えている。馬琴の考証で面白いのはこれら説話の流布に力のあった絵巻物に注意を払っていることである。絵巻物は絵合の余波であり、それがのち梓にのぼされひろく流布したといっている。

江戸時代の文献で、もう一つあげておきたいのは「嬉遊笑覧」である。巻の九（言語）に「ぢぢばばの物語」の一節をもうけ、「今も小児のすなる昔々の咄はげに古きものと聞ゆ」とあり、猿の尻は赤いとか、狸が火傷をした話などのことを記している。また「瓜姫」の話を紹介して、「小児の昔咄古書に似たるもの多かり、又必古事にもよらず、をさな遊びのこと付て出来しもあるにや。瓜姫の咄など是なり。今江戸の小児多くは此話をしらず云々」とある。そしてこの話の筋を述べ、「桃太郎の話といづれが先なるか、もとづく処は竹取の翁などにや」とある。民間の説話はすべて記録文芸にもとずいていると考えていたらしい。民間の昔話としてひろく分布している瓜子姫の話を江戸の小児が多く知らなかったとあるのは面白い。このほか桃太郎、舌切雀、酒顚童子、花咲爺などについても多くの文献を引用して解説しているが、桃太郎が鬼が島に宝物を取りに行ったのは、桃は五木の精で、仙木であり、邪気を圧伏し百鬼を制する威力がある故に桃太郎の話ができたといった風な牽強附会の説がはかれている。

江戸時代の研究については断片的なものがなお随筆類に見えているが、上述のものにとどめておき、ただちに明治時代に入ることにする。明治になると西洋の神話学などが紹介され、説話の研究もずっと学問的になった。それらの中から目ぼしいものを順にあげてみる。

二

まず民間説話というよりも伝説の領域に属するものであるが、坪内逍遙が明治三十九年一月「早稲田文学」に掲載した「百合若伝説の本源」は最も興味あるものであり、問題は今日にいたるまで依然としてかたずいていない。結論を先にいうと、逍遙は百合若物語をギリシャの名作「オディッシー物語」の梗概を飜案したものだとなしたのである。この論考に

ついてはのちに津田左右吉博士の批判がその著「文学に現れたる我が国民思想の研究（武士文学時代）」（大正六年刊）にあり、それに答えた逍遙の「百合若、酒顚童子、金太郎等」（大正十一年七月「中央史壇」所載）があるので、それらを併せてここに述べてみたいと思う。逍遙はまず最初の論文において、わが国の歴史的伝説の主人公がいずれも国史に名をとどめた人物なのに反し、ひとり百合若のみはそれに適合する人物のないのを不思議に思っていたと述べ、江戸時代の文献をみてもただ豊後の人とあるのみである。この物語の最古のものと思われる「舞の本」をはじめ、近松巣林子の「百合若大臣野守鏡」、為永太郎兵衛の「百合稚高麗軍記」、「大伴金道忠孝図会」などを比較考証してみてもこの伝説の出所については納得できるものがなかった。しかるに逍遙は、「近頃所要ありて希臘上代の事蹟を取調ぶる序に、彼の国の古名作及び之れを論じたるものなど二つ三つ読みゆくうちに、ふと百合若物語とホーマーの名作『オディッシー』とが頗る相似たりと思ひ附くと同時に『オディッシー』の羅甸名のユリシスたることに思ひ及びて、」と両名の関係を説明している。すなわちユリシス王は百合若大臣、イサカは豊後、漂流中の妖魔は妖術を使う蒙古人、故国と漂流先との間に通信者となれる女神ミネルバは緑丸という鷹、またユリシスが老乞食となって王宮に入るのは苔丸の段に符合し、鉄の弓の件と十二環の件とは、正しく話の血統を同じくしている。「舞の本」の門脇の翁、浄瑠璃の府内某はユーシウスに該当し、王子テレマカスの役廻りは市郎丸秀虎、悪文次秀景、また愛鷹緑丸が非情の飛禽でありながら忠勤を尽して死するいじらしさは忠犬アルガスが主を見知りて喜び死に死すという段に因みがあるという風に彼此の物語を対照せしめている。そして結論として次の如く書かれている。「要するに、百合若物語は『オディッシー』の梗概を飜案せしものなること些も疑ふべきにあらぬものから、いづこの国人より、いつごろ我が国には伝へたりけん。我が文芸復興のフロレンス、ネープルスともいふべき山口、堺などを経て生ひたちしものかとも思はるれども、未だ考へず。若し、お伽草紙のを最古のものとすれば、今より四百年以上の昔なるべきか、それが尠くとも二千八九百年前に成りたる希臘太古の名篇而も東西古今に亘つて比類なき名作の『オディッシー』の飜案とは思ひがけなき関係にはあらずや、これによりて考ふれば、我が足利以降の文学と西洋文学との交渉は、従来の考証以外にいでて更に尋ぬべき点尠からざるが如し」

この坪内逍遙の説に対して、前述の如く津田左右吉博士が異議を唱えられた。主たる論点をいうと、「オディッシー」の興味の大部分を占めている冒険的航海譚が百合若物語には少しも見当らず、百合若物語で最も重要である別武兄弟が主家を奪うということがオディッシーには全くなく、また人を喰う一眼鬼族（サイクロップズ）の話など鬼の話の多い室町時代の趣味に適切なのにまるで見えていない。却って「御曹子島渡り」の方にユリシスの冒険譚に似た筋があるのは矛盾

だといわれた。これに対して坪内逍遙は、前掲の論文「百合若、酒顚童子、金太郎等」の中で、これらの反証は自説をくつがえす力が弱いとて次のように答えている。すなわち逆臣が主家を奪う件がないというが、ユリシスはイサカ国の王であり、その不在中に妃のペネロープに婚を強要する豪族等は畢竟彼の旧部下であるから、別武兄弟のモデルは取りもなおさず彼等豪族といってよく、航海的冒険譚が百合若に見えないのも少しも故障にならない。それというのも冒険譚はオディッシーの本筋ではなく挿話に過ぎないからである。そういうものまで取入れると話が複雑になるので、室町時代の作物としてはむしろこれを切離して別の話とするのが当然であった。そして、その切離された部分が、粗末で幼稚であるが「御曹子島わたり」に編入されたのだと答えている。つまり逍遙によれば百合若だけでなく、御曹子島わたりもオディッシーからでたものであり、さらに「天稚彦物語」、「酒顚童子」などの話は筋も情調も異国的で、室町時代に入って突如としてあらわれてきたものであり、これらはいずれも西洋の説話から影響を受けたものであるというのであった。逍遙はこれについて次のように述べている。「按ふに、いずれ是等の話は最初ポルトガル人が持つて来たものに相違ないが、勿論それは一の完備した文学的作品として之れを日本に伝へようとしたのではなく、或ひは航海中のつれづれの伽話に、乗込んでゐた或日本人に話したとか、或ひは携へてゐた書物とか、器物とか、織物とかに描かれた絵画の説明に物語つたとかいふやうな事が発端で、最初からちぎれちぎれに語り伝へられ、さうして次第に広まつたものかも知れない。果してさうだとすると、あの浩繁な、複雑なオディッシーが、先づ本筋だけが百合若物語となり、漂流奇譚の輪郭だけが御曹子島渡りとなり、尚ほ其他の幾部分かが当時の他の話へ紛れ込んだと見るのも、強ち不理窟な臆測とばかりはいへまい。私は酒顚童子や土蜘蛛退治をも、これは符合点はやゝ薄弱だが、やはりオディッシーの断片に基いた飜案話ではなからうかと疑つてゐる。」

西洋の神話や古伝説やお伽噺が室町時代以後わが国にしきりに流れ込んだ証跡の一つとして逍遙はさらに天稚彦物語をあげ、これをギリシャ神話の「サイキとエロス（キューピッド）」に対比せしめている。これについては百合若物語とオディッシーとの関係を否認した津田左右吉博士も、サイキの物語と偶然の暗合とは認められないといわれた。ただ逍遙は津田博士が「欧州人によつて直接に我が国へ伝へられたのでは無く、其昔、所謂ガンダラ芸術に於いて、大乗仏教と希臘羅馬の芸術とが結合したと同じ経路によつて、此羅馬時代の物語が仏教の経典に採入れられ、それが斯ういふ形になつて現はれたものであらう」と推断しておられるが、「此点だけは私とは全く意見が違ふ。」と述べている。

この百合若物語についての坪内説は有名であり、この後、百合若伝説についての考察には必ず問題にされるのはいうまでもないが、説話伝説の伝播を考えるものにとって誠に重要

な問題なのである。わが国の説話伝説の外国のものと類似のものがあることは少しでもこの方面を研究すればすぐに気がつくことであるが、それが彼此独立に成立したものでなければいかなる時代にいかなる経路を経てわが国に移入されたかが尋ねられねばならない。百合若物語オディッシー説に対しては、新村出博士も「南蛮記」の中で触れておられる。これは坪内博士も私の此考証を期せずして裏書きしてくれたものだといっておられ、前述の論文にも引用されているものである。

「南蛮記」中に「ルシアダスと百合若物語」の一節がある。これはポルトガルの叙事詩人カモエンスの生涯を叙したものである。彼は天才詩人であったが、故国を追放され、インドに到り、ついでマカオに流寓するなど轗軻不遇の一生をおくった。しかしその大作は「ルシアダス」によって不朽の名をポルトガルの文芸史上にとどめている。この「ルシアダス」と並んでベレイラの「ウリツセア」という叙事詩がつくられた。これはポルトガルの首都リスボアをウリツセス（オヂツソイス）が建立したという伝説にもとづいてつくられたものである。このオヂツソイスの冒険談がポルトガルの航海者の口から極東の港に伝わり、語り継ぎ、言い継がれるようになりはしなかったろうかと、新村博士はいわれており、さらに日本人は嫣港か、ゴアか、さもなければ「波濤の謫所」でカモエンスに合う機会があり得たはずであるから、万一その口から古ギリシャの百合若の話を聞いたならば、この上もない面白い話であるとまで想像をめぐらせておられる。博士はまた「文祿旧訳天草本伊曽保物語」（昭和三年刊）の附録、「西洋文学翻訳の嚆矢」の中で、天正年間に開かれた各地の切支丹の学林で、オディッシーズのような希臘古典のラテン訳を学堂の裡では講じなかったにしても教会の影で少年に話して聞かせた師匠はなかっただろうかといわれ、あるいはまた旧式の修行を経た伴天連どもがお伽噺として伝えたと考えるよりも、自分はむしろ黒船の船員や南蛮の商人の口からこの物語を聞かされたと信じたいとまで空想を馳せておられる。

百合若伝説の研究は坪内説に対する津田博士の批判以後しばらく途絶えていたが、昭和時代に入るとこの伝説の本場である九州地方から市場直治郎氏や山口麻太郎氏の研究があらわれるようになった。市場氏は「旅と伝説」（五巻二号昭和七年二月号）に「百合若伝説私考」を、また「放送講演集九州郷土講座」（昭和八年刊）に「輸入伝説の考察」を発表されて、この伝説を民間に語られる伝説資料から考察された。これまでの比較研究では舞の本の「百合若大臣」だけを取上げてこれをユリシーズ物語と比較していたが、民間の伝説は舞の本のものとは内容の異なるものがあり、舞の本に文芸化して固定される以前の形とみらるべきものが少くない。ことに注意すべきは壱岐島にイチジョと呼ばれる巫女があり、彼等が語っている百合若説経のあることであった。市場氏によるとこれら民間に口承されている百合若には舞の本にはなくして、オディッシー物語にあるものがある。豊後に伝わる話

に百合若が島をのがれて本国に帰ったときに人相が変っていたので、だれも気がつかなかったのに、百合若の愛馬青馬がよく覚えていて涙をぼろぼろ流して喜び嘶いたとある。また壱岐に伝わる話でも鬼鹿毛というむかし飼いならした馬が七重の膝を八重に折って迎えたとある。これは舞の本にはない話であるが、ユリシスの物語には類似の話がある。すなわちユリシスが愛していたアーガスという老犬が死ぬばかりになって伏していたが、ユリシスが這入ってくるのをみると、耳を垂れ尾を振ったとある。また津田博士が輸入説に対する反証としてあげられた一眼鬼族のことも、舞の本では百合若が蒙古征伐に出掛けることになっているが、豊後や壱岐に伝わる伝承の中には百合若が鬼界ケ島に鬼退治に行くことになっているものがある。しかも一眼ということはないが鬼と睨らめっこをする話があり、鬼の眼力が強いので、鉦を額にあてて勝ったとか、鬼が目性比べに負けて血の涙を流したとか、眼に関する話が附加されている。またユリシスでは一眼鬼のサイクロプスがユリシスの船を目がけて岩のつぶてを投げかけるが、壱岐にある話でも鬼が百合若の軍船めがけて石のつぶてを投げたとあり、その遺蹟というのが語り伝えられている。これらの点から考えると舞の本以外に民間に伝えられる百合若物語をも取上げると坪内説は一層有力なものとなり、坪内博士がもし民間説話を承知しておられたなら津田博士の反論を容易にしりぞけることができたし、一方津田博士が民間の物語を知っておられたならば、あのような反対説は唱えられなかったと思う。

このように見ていくと民間における百合若伝説は坪内説を裏書きするような結果になる。これに対して市場氏は次のような意見を添えられた。この伝説のすべてが希臘神話の翻案であることは、これだけの証拠を以ってしても、尚謂い得られぬ様である。即ち此の百合若伝説が大体に於て外国種としても、それが斯く国土に根をおろして、恰かも国土に発生し成長したものと同様に融合してしまったのは、何かそこにこれを斯く受け入るべき基、接木が繁茂成長する為に必要な元木があったのではなかろうか。尚又、これに別の種子より生えた樹が寄生していないだろうか。この点を吟味して見る必要があろう。

これは極めて穏当な説で、わたくしも大体において同感である。市場氏はそこでこの伝説の元木と思われるものについて、いろいろと考証を発表した。まずユリシスの物語になくて舞の本にある百合若の御台所の身代りとして、門脇の翁の甥忠太が自分の娘をマンオウガ池に沈める話が注意されねばならない。次にこの伝説のわが国における発生地と考える九州地方では百合若が英雄伝説の主人公としての色彩が濃厚であり、為朝伝説と極めて類似するものがある。山口麻太郎氏によれば、壱岐などの百合若物語は昔話として語られ桃太郎の話となっている。百合若は桃から生まれ、幼名を桃太郎といった。王様の娘を嫁に欲しいと思って、まず風呂焚となった。王様は鬼ケ島を退治して来たら娘をやるという。そこで

百合若と名を改め七千艘の船をつれて鬼ケ島（いまの壱岐島）に着き、鬼を退治してかえろうとする。鰯船に頼んで乗せて貰うとすると鬼と思って乗せてくれない。やっと頼んで無理に乗せてもらって国へ帰えると知っている人はだれもない。ところが王様の家に百合若しか乗りこなせない馬がいたので、それに乗って美事に乗りこなしたので、やっと百合若とわかり姫と結婚できるという話である。この百合若の英雄伝説は東日本の方へくると巨人伝説として語られている。上州妙義山の射抜穴とか確氷峠の百合若の足跡などが遺蹟として伝えられている。このことはすでに「嬉遊笑覧」巻四武事の項目に「肥後国八代領の内に百合若塚と云あり。塚の上に大木あり所の者云く、百合若はいやしき者なり。世に大臣といふは大人なり、大太とも云、大人にて大力有て強弓をひき能礫を打、いま大太ぼつちとは百合若の事なり云々」と書かれている。

結局、市場氏の説では百合若伝説の後半がユリシス物語と結びついたろうというので、この伝説の発生地と考えられる豊後の国府すなわち府内は豊後文化の中心地であり、鎌倉時代以後は守護大友氏居住の地となり、室町期の大友義鑑のとき蛮船渡来のことがあった。ポルトガル人、種子島漂着の天文十一年には西蕃が来りて鳥銃を伝えたという記録があるという。されば輸入種のユリシス物語が、当時この地方に伝えられていたと思われる為朝の武勇譚などと融合し、また万寿姫投身伝説と結びついて舞の本系統の話をつくりあげたのではないかというのが市場氏の考えである。

この市場氏の考証に関連して同じく「旅と伝説」（五―五）に発表されたのが中山太郎氏の「百合若伝説異考」である。中山氏の説は大体において市場氏のものを補説したものであるが、論中最も注意すべきは折口信夫博士の壱岐島採訪によって得られた見聞を引用してあることである。その要点は欧州からユリシス物語の移入せらるる以前に、すでに巫女の間にユリ説教またはユリワ説教とも称すべきものが存在したのではないかということである。壱岐のイチジョウと称する巫女は神下しの祭文にユリワカ説教というのを語り、それを語るときユリと称する曲物に弓をくくりつけ、弦を二本の細い棒でたたきながら語るのである。これらの事実を踏まえて中山氏は次の如くいわれた。「これを要するに、百合若伝説の本質は、初めは巫女の謡ひものであつた本地物に出発し、更に一種の唱導文学として衆人に口誦されてゐるうち、此の種の文学の退化する理法により、後には民譚となつて各地に運搬される間に、種々なる異分子が附会されて、頗る語り歪められて妙なものになつてゐたところへ、偶々新輸入のユリセスの物語と結びつけられたものであると云ふのが私見の結論なのである。」ただしこのユリシス物語の輸入について、中山氏は、山科言継の日記巻十六、天文二十年正月五日の条に「今日、北畠之千秋万歳参、曲舞和田酒盛、次こし越、次ゆり若等也」という記事を引き、これが百合若舞の正確な記録の初見であるらしいが、日葡交通の起原が天文十二年八月と

すると、その間わずかに七年であり、葡人来朝のはじめにユリシスの物語が伝えられたとしても、それが舞曲とまでなって京都へ持参されるというのは流布の速度が早すぎるので、やはりユリ説教という台本のあったところへ、ユリセスの話が接木されたので案外流布が早かったのであろうと、大体結論としては市場氏と同様の見解になっている。

百合若の話ばかり長く書きつづけたが、最後にもう一つ金関丈夫氏の最近の論考がある。「木馬と石牛」（昭和三十年刊）の中に、「百合若物語」、「中国の百合若大臣」の二篇がある。金関氏の説は坪内説に対して疑問をなげかけられたものであり、中山太郎氏がすでにいわれたように、幸若舞の演目の記録とポルトガル人来朝の時日との間に説話が輸入され消化されるには期間が七、八年では短か過ぎるということが一つ、またオディッセウスのラテン名ユリセスが百合若と似ているというのが坪内説の有力な理由の一つであるが、ポルトガル人は Uly をユリとは読まず、天文当時の記録では、幸若の若衆には、花若あり、後に藤若があり、別に百合若があっても不思議でない。坪内説のように百合若が日本人にとって不思議な名とはいえないというのである。しかし、それよりも内容からみて、インドの紀元前四世紀の頃のものとされている叙事詩「ラーマヤーナ」や「マハーバーラタ」には百合若の類話があり、紀元後六世紀の「賢愚経」にも同類の話がある。これらが日本へ移入されたとも考えられるが、それよりもギリシヤにもインドにも日本にも、元来、文学の発生以前に、民間説話として古くから同趣の話がひろがっており、それが各自独特の発展をとげたものだと考える方が無事であろうとある。金関氏の所論で他の人があまり触れないことに、日本紀の応神紀にある武内宿弥の話と百合若とに類似した点のあることを指摘していることである。宿弥が宇佐に使いするとき、弟に裏切られて死罪を科せられる。忠臣の身代りでひそかに生き、南海を流浪して紀州より大和に入り、思わざる死者の帰還の形をとって裏切者の前に現われるという節である。この武内大臣の話は、単に大臣の話として伝えられたのではなかったか。たまたま幸若の太夫に百合若なるものがあって、その名がその上に冠せられるに至ったのではないか。話の百合若が大臣と呼ばれなくてはならない理由は殆んどないところを見ても、私のこの疑いは無稽とはいえないと思うと書かれている。事実幸若の演目を記録した室町時代の文献には百合若をただ大臣と書いてあるものがあるから、この説は十分考慮に値すると思う。なおまた神武天皇の東征譚もこの話の変化と思われるし、井沢長秀が「広益俗説弁」の中で、百合若物語は伊予の河野氏の家乗「橡章記」にもとづくものというのも面白い説だとあり、百合若、武内大臣、神武天皇などいずれも宇佐を舞台の中心としていることは海神住吉を奉じた北九州から瀬戸内の海人部族を、この説話の伝承者としていたことを語っているのではないかと論じてある。そして信州諏訪や近江甲賀を舞台とする甲賀三郎の物語はこの海人族が内陸へ入ってのち主人公の海上漂流を地底遍

歴にすり換えたのではないかという興味ある想像をも述べてある。甲賀三郎が百合若と関連のある物語であることはすでに坪内博士も言及されているが、この物語についてはまた改めて説く機会があると思う。筆のついでに紹介しておきたいのは米人ヒッバード(E. L. Hibbard)が百合若物語について坪内博士と同一結論の論文を書いていると金関氏の論考に見えている。また高野辰之博士は坪内説に対する反対意見を早稲田文学(明治四十年二月)に「壱岐の百合若伝説」として発表されたというが、目下文献が手許にないので触れることができない。

三

わが国の民間説話の研究について逸することのできないのは上田敏博士の業績である。博士は英文学者として早くから英国におけるフォクロア(民俗学)の研究に着目されていたので、その研究の中心題目である民間文芸について興味を抱いておられた。ひとり民間説話というだけでなく、英国にはじまった民俗学について最初に紹介された一人であり、それに関する論考は、「上田敏全集」第六巻に収録されている。

氏は英国の民俗学協会で採用している民間伝承の分類を紹介し、その中で民間説話に関する領域について次のような分類をあげてある。

(一) 古伝 Saga 即ち真の事実として伝えられたハナシである。いづれの国の古代史も近世科学の研究が及ばない間はこの古代である。

(二) お伽話 Märchen 或は Fairy Tales また日本のお伽噺と全く同じ語にて Veillée といふ。

(三) 動物譬喩談 Fable は万国共有のものであるが、彫琢されて文芸となったのは印度及び希臘を始とする。仏教の Jâtaka(本生経)、梵文学の Panchatantra(五部書) Hitopadeça(嘉訓)、希臘の Aisopos 羅甸の Phaedrus 中世の Reineke Fuchs(狐の裁判)等が適例である。

(四) 笑話 笑を来たし、単に面白可笑しく慰になる戯言である。何事の説明でもなく、何の寓意も無い Droll の類をいふ。

(五) 神話 希臘神話、北欧神話の如く、系統あり組織ある Myth を始とし、すべて自然神話、推原論、英雄伝説等の断片をも含む。

(六) 地理伝説 名所図絵などにも見える山川木石等についてのイヒツタへを含む。殺生石の類はこの部門に入る。

これらの中ここに問題として取上げているお伽噺と古伝神話との区別について、古伝神話に現われた神明、英雄は一定の名称を持ち、多くは一定の土地に関係して、かって実際にあったこととされているのに対し、お伽噺の世界はすべて漠としており、今は昔とか、昔々あったとかいうばかりで、人物の名も多く定っていず、何処とも誰とも当てがない点で区別されると説明されている。また古伝と神話とお伽噺と、その何れが先に発生したか、それは全く分明でなく、三者の

間には常に連絡があり、交替があったがその間に確とした分界線を引くことはできない。お伽噺の如きは、今日、単に幼児の娯楽或は夜長の徒然を慰めるよすがとのみ思われているが、よく考えてみると、古伝神話と同じく原始社会のイヒツタへを包含していて、神代文化の歴史、信仰、思想、旧慣、制度等をほのかに垣間見せる大切な且つ興味ある材料を供給すると説明されている。これは今日の研究からみてもほぼ妥当な見解といえる。

上述の論考のほかに昔話の研究についてとくに触れておきたいのは、「お伽噺考」という一文である。これは「不二新聞」を主宰していた宮武外骨氏の要請によってなされた講演である。まず、お伽噺すなわち昔話には一定の型式があることを注意してある。たとえば語り出すはじめの言葉に、昔々とか、今は昔とかいう風にきまった文句がある。この方式は外国の昔話でも同様であるといってその例をあげ、さらにそれが記録文芸の上にもいろいろな形で踏襲されていることを指摘してある。また話の終りにも「目出度し目出度し」といったようなきまり文句のあり、現代の小説の様にフイとやめてしまうようなズルイことはせず、主人公と女主人公とが夫婦になるとか、家が栄え、数多くの子孫を儲けたという風ないわゆる大団円になるのが常で、この方式は小説にまで踏襲された。そこでこのお伽噺とは一体何んであるかが問題であるが、それを説くには一つの学問、英国でいうフォクロアすなわち俗説学（民俗伝説学）の知識が必要であるといって、今日の民俗学を紹介し、その三部門分類を説明してある。

このうち第二部門にお伽噺が属するのであるが、噺というものは、これを慰みのため、娯楽のためにする笑話と、こういうことのあったと信じて語るものとの二つにわけられる。この第二の方にはサガ、ミスという古伝、神話が入るが、お伽噺もここに所属される。このほかに動物譬喩談があるが、これは第一と第二との中間に位置するものである。第二の方の噺の中でも、お伽噺は神話や古伝と較べると余程漠然としている点が異る。古伝と神話との区別は、まず古伝は昔の人の記憶に残った歴史である。神話は奇蹟の分子が多く、未開人の世界観、天地開闢説が入っている。古代はいわば歴史の類であり、神話は後世の哲学科学の類であると、それぞれの噺の別を説いてある。この講演の主題であるお伽噺については、その中に現われる事件にしたがって四つに分けて話を進めている。第一は原始人の心理を示す所の事件、第二は魔術、万物有生論、動物姓氏説（トテミズム）などに関する原始人の信仰を示す所の事件、第三は原始人の風俗習慣を示す所の出来事、第四は原始人の宇宙説を示す所の出来事である。この四種類についてさらに例をあげて説明してある。第一のものではお伽噺に多い命の水について、第二については魔法と変形、第三の風俗習慣では、食人、禁制（タブー）、相続（末子相続）、第四では天地の別れた話といった類である。最後に結論としてお伽噺は各国に似たものが多い。その理由として何処かで一つあった話、多くはインドであるが、

それが東西各地へ伝播したという説で、これは有力な説で真理もありそうだが私はそうは思わないとて上田博士は次の如く自説を述べている。

「人間と云ふものは、今でこそ変つて来て居るが、昔は同じ様なものであつて生活の状態が同じである。又知識も同じであると同じ事を考へ出すものである。だからお伽噺と云ふものは、或る中心点より方々に伝播したものでなく、同じ様な文明の程度に居たものが考へ出したものである。私は此の方を取る。併し此の説は実は両方共互に相反撥して、一つを取れば他を取つてならぬと云ふのでない。私の説は第二の方を真とするが、併し偶には他の国から伝はつたものもあると云ふ風に考へて居つて、二つの説を調和して取りたい。何方かと云へば第二の説であるが、印度辺りから伝はつた事も歴史上にあるのであります。」

上田博士には以上のほかに「伊曽保物語考」、「羽衣伝説数種」、「月男の説」、「仙女の説」、「卒堵婆小町について」、「袈裟伝説一則」、「金々先生栄華夢に就て」、「菩薩物語由来」、「七賢人物語考」、「愛蘭土の伝説」など伝説説話に関する諸篇がある。別に希臘神話の解説もあるが、これらの中「伊曽保物語考」は諸本と比較して、この物語の源流をたずね、とくにインドの動物譬喩談との関係を考察した長篇である。ただ興味を感ずるのは上田博士がお伽噺の各民族独立起原説を支持しているのに、この伊曽保物語についてはインドよりの伝播を説かれたことである。すなわち「東洋の古文明国印度に行はれた動物譬喩談と希臘喩言伊曽保物語との類似は否定すべからざるものであつて、何等かの関係が二者の間に在ることは疑無い。此二者の類似は活物論（アニミズム）が生んだ偶然の暗合とのみ聞流されぬ。（中略）同じ程度の文化にある二国民が各自独立に似たやうな考へを持つことはあり得可く、どこも人情に変りはないから、或る点まで同型の話を作り出すであらう。然しいかに古来の活物論が深く通俗の精神に浸梁してゐても、わざわざ動物警喩談といふ形式までも同一な同じ筋の話を、二国民別々に発明しようとは思はれない。而もさういふ話が一つや二つならまだしも、数十種まである以上、これは単純な暗合では無いと、まづ仮定せねばならぬ。」

イソップ物語については翻訳書も論考も多いので、別に取上げて研究の跡を省るつもりである。

上田敏博士と同じく英文学者として令名の高かった厨川白村博士も民間説話について興味を抱かれ、その研究の急務なることを説かれた。氏の「小泉先生そのほか」（大正八年刊）に、「お伽噺の話」という論考がある。これは最初大阪朝日新聞に連載されたものであるが、日本の説話と外国の説話との比較研究を盛んにすべき必要を力説してある。一例としてお伽草子にある「鉢かつぎ」の話を取上げ、この型の話が、英国のアンドリュウ・ラングの主宰した伝説学会の研究によると世界に三四五種の変化型が分布しているとある。この伝説学会とあるのは多分フォクロア・ソサイエティ（民俗学協

会）のことであり、鉢かつぎ型の話が世界に三四五種も分布しているというのは、この協会から出版されたコックス女史（Miss M. Roalfe Cox）の "Cinderella. Three Hundred and Forty-five Variants. 1892." によったものと思う。これにはアンドリュウ・ラングが序文を書いている。

シンデレラ型というのがこの話の総称であり、わが国の「鉢かつぎ」もその一変型とされている。上田博士は、「日本民族が昔から語り伝へた此鉢かつぎの話は、世界各国民の有する説話の比較研究者に取っては、たしかに我国宝の一つである。此話は種々に形を変へて遠い古代から世界中到る処に伝播してゐる。」といわれ、「シンデレラの字義は灰掻きの女といふ意味で、お伽草子の鉢かつぎの中に、湯殿におけとありければ、未だ習はぬ事なれど、時に従ふ世の中なれば、湯殿の火をこそ焚かれけれ、とあるに一致してゐるのも面白い。」と述べてある。ついでシンデレラの話の梗概を紹介したのち、この説話の変化部分として興味のある継子に対するヘルペー（助力者）について各民族の話における種類をあげてある。日本の「鉢かつぎ」では初瀬の観音になっているが外国の例では、仙女、牛、山羊、羊、犬、鳩、樹木などが可憐な女に助力をあたえている。

最後に厨川博士は、「此説話は、之を伝へはじめた時代に各の民族の文化の程度や或は気風の相違などによって、剛壮なのもあれば、詩的なのもあり、趣向も簡単なのと複雑なのとの違ひはある。しかし、母に死に別れた子供の可憐な境遇、観音とか仙女とかまた何等かの超自然力の救済、最後に王子或は美女との幸福なる結婚、この三つの要点に於てすべて一致してゐる。」と述べ、「原始時代に於てすべての人類が思想発達の同じ階段に在つたとき、同じやうな事を同じ様式で考へた所に、ラング一派の比較説話学の興味が在るのだ。」と結ばれている。これでみると説話がある中心から各地に伝播したというよりは、同じ文化段階にある各地民族の間に独立して発生したという説に傾いているようにみえる。厨川博士はさらに遠い祖先の代から、親から子へ子から孫へと語り伝えた伝説神話は、彫琢を加えず修飾を用いなかった古代民族の自然の儘の詩歌であるとされ、その貴き遺物であることは考古学者が太古の石器や土器を研究するのと同じく民族伝説、郷土伝説もまた学者の摯実なる研究に値すると説かれた。しかるに「わが国では斯学の進歩が今日なほ萎靡して振はないのは遺憾である。」となげかれ、僅かに「比較神話学」の著者高木敏雄、「山島民譚集」の著者柳田国男両氏の努力があるのみといわれ、「日本の現代では斯学は未だ研究材料の蒐集時代に在るのだが、更に進んで、人類学比較宗教学民族心理の研究と相俟って、真の組織的比較研究の時代に入るの日は果して何時の事であらうか。」と前途遼遠なるを慨嘆されている。実際シンデレラの話一つにしても、当時現在のように民間説話の資料が蒐集されていたならば、上田博士にしても厨川博士にしても、もっと有益なる論考を残されていたに相違なく、またとに残念というべきである。

この白村氏の投じられた一石が実を結び出すには昭和に入って柳田先生の「桃太郎の誕生」（昭和八年刊）の出現をみるまで待たねばならなかった。同書開巻（三頁）に次の如く書かれている。

「我々の昔話の中でも、特に外国に於ける斯道の学者を感動せしむべきものは英国でいふシンドレラ・グリム童話の灰かつぎ姫、日本で糠福米福などと呼んで居る物語であつた。是が我邦に入つて来てから、如何に短くても千年は超えて居るだらうと思ふが、話は其間に誠に僅かばかりしか変化を受けて居ない。蜜柑の皮を遠くから妹に投げ付けたといふやうな、些細な点までが尚残つて居る。さうして北は青森県の淋しい村から、南は壱岐島の海端にまで、数多く分布し且つ今も活きて居る。英国のシンドレラ研究者ミス・コックスが、若し此事実を知つて居たならば、彼女の記念碑的名著も必ず若干は其体裁を改めて居たことと思はれる。故厨川白村君などは、日本に彼女の目の届かぬ一隅があることに心付いて、柳田の如きはなぜ早く之を説かうとせぬかといふことを、曾て大阪朝日紙上で注意せられたこともあつたが、実は其頃までは未だ私なども、さう大きな問題とも思つて居なかつたのである。それに国内の蒐集が、一向に進んでは居なかつた。今とても決して豊富とは言はれぬが、兎に角に新たな材料によつて、其後明かになつてきたことが幾つかある。文学即ち記録文芸の上では、此話は普通に紅皿缺皿の名を以て知られて居る。馬琴の皿皿郷談などは全く之に由つたもので、話を美作の久米の皿山の歌に結び付けたのも、彼が独創に出でたる趣向では無かつた。今ある住吉落窪の物語を始として、日本に最も数の多い継母話の源の種も、恐らくは之と無関係に生れ出たものでは無かつた。」

これをもってみてもシンデレラ型の昔話がお伽草子の鉢かつぎ以外に民間説話としてわが国にひろく分布していたことが明白である。この話が糠福米福などの名前で東北地方に語られていることは、金田一京助先生の「日本のシンデレラ説話」（民俗学三巻八号）に詳論されている。金田一博士は「粟ぶき米ぶき」とか「粟福米福」とかいう名前について継母が娘に粟拾いなどにやらしたとき持たせた袋に関連した考察を加えられた。話の筋とは関係ないが岩手県で語られるこの話が甲州のものとよく似ているのは外の国との類似のような偶合でなく南部家が甲斐源氏の出であることに由来するのではないかというような意見もある。その他継娘が山姥から貰った小袖を糠屋にかくしておく話や糠ぶくという娘の名前などから糠屋が娘の私室であったことを注意してある。西洋のシンドレラの話にある玉の靴が風俗のちがいから日本のものにはなく夜会の舞踏会が神楽堂の神楽を見にいく話になっていること、継娘の助力者としての山姥や小鳥などについても西洋のものといろいろと比較考察されている。ベアリンググールドはこの話を東洋種、多分インドが発源地であろうというから、一つは西にしてヨーロッパに入り、一つは東にしてシナ、朝鮮を経て、余程古く日本に入ったからこそ、中央

に忘れられて、甲斐の盆地だの、北奥の田舎に残っていたのであろう。また余程古く入ったからして、かくまで地方化してしっかり根を地盤に下していたのであろうとある。

シンドレラ物語について、このほかに南方熊楠翁の論考が「人類学雑誌」（明治四四年三月号）に発表され、のち「南方随筆」に収録された。「西暦九世紀の支那書に載せたるシンデレラ物語」（異れる民族間に対する類似古話の比較研究）という題目であるが、まず最初に説話の比較研究する態度について次の如く書かれている。「明治四十一年六月の早稲田文学、予の『日本時代史に載せたる古話三則』中に述し如く古話に其土特有の者と、他邦より伝来の者と有り、又古く各民族未だ分立せざりし時代既に世に存せしと覚しく、広く諸方に弘通され居たる者有り、一々之を識別するは、十分材料を集め、整理研究せる後ならば叶はぬ事也」とあり、また「古話に於ても、記録せる時代の先後は、必しも其話が出来せし早晩と偕はず、併し斎しく文筆の用を知居たる諸国民に就て、同種古語の記録の先後と、類似せる諸点の多寡を察すれば、大要其譚の、先つて何れの国に専ら行はれ出たるを知るに難からじ。」とある。類似説話の具体例として、わが国で大岡裁きの一つとして知られている二人の女が一児を争う話をあげ、旧約全書にのせたソロモンの裁判はこの話の最も古く伝われるもので、それがいろいろの補刪を受けて漢土や日本へも入ってきたのだろうとある。さらに先述した百合若物語のことに言及し、大体において坪内説を承認し、南蛮人が斎らしたギリシャの古譚が日本に転化されて百合若の物語となり、幸若の舞台に用いられて盛んに人口に膾炙したのであろうとある。本題のシンデレラ物語については、「西陽雑俎続集」巻一にある話を紹介してある。前掲のコックス女史の集めたものにシナの例が見当らないようだから、この物語の欧州特有のものと思っている人々の耳目を広むるに多少の益があろうとある。

百合若にしてもシンデレラにしても、民間説話の外国種であること、それがいかにして移植されたかを実証することはむつかしい。現代の翻訳文芸のように外国のものがそのままの形でごっそりこちらへ根を下ろし、それがすぐに民間説話として流布するということは考えにくい。民間説話のタイプやモチーフには外国のものと共通なものがいくらもあるが、それがどこからか伝播されたとしたら、それは長い年月にわたって輸入されたものが積み重なった結果であり、わが国土へ入ってからもいろいろな形で絶えず成長しつづけてきたのである。外国人の口からただ一度聞いたというだけでは民間説話として成育するのは困難であり、各種の条件がそれに加ってはじめて土着できるのだと思う。

（未完）